

盛岡会場

登壇者
プロフィール



第1部 臼澤みさきさんのコンサート



歌手

臼澤みさき (うすざわ みさき)

今年7月25日歌手デビュー。大槌町在住の中学生。

小学校3年生の時から、民謡を習い始め、一昨年の「青少年みんよう全国大会」でグランプリを受賞、昨年の「外山節全国大会 少年少女の部」で優勝、「南部牛追唄全国大会年少者の部」で最優秀賞を受賞した。

東日本大震災前より、高齢者施設へ慰問し歌を披露することもあった彼女は、震災後、避難所を回って歌を届けた。このような活動の最中、テレビの取材を受けたことがきっかけで、この度デビューすることに。

デビュー曲は、「故郷^{ふるさと}～Blue Sky Home Land～」。

故郷を離れた人が、遠く切なく故郷を想う気持ちが込められている。

臼澤みさきオフィシャルサイト

<http://www.teichiku.co.jp/teichiku/artist/usuzawa-misaki/>

第2部

シンポジウム「震災と人権～一人一人の心の復興を目指して～」



コーディネーター

横田 洋三 (よこた ようぞう)

公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長

法務省特別顧問

国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員長

日本国際連合学会理事長

- 1971年 国際基督教大学教養学部助教授
- 1974年 世界銀行法務部法律顧問
- 1979年 国際基督教大学教養学部教授
- 1983年 アデレード大学客員教授
- 1984年 コロンビア大学客員教授
- 1988年 国連差別防止及び少数者保護小委員会代理委員
- 1991年 国連人権委員会ミャンマー担当特別報告者（～1996年）
- 1995年 東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授
- 2000年 国連人権促進保護小委員会委員
- 2001年 中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問
- 2003年 ILO条約勧告適用専門家委員会委員
- 2004年 中央大学法科大学院教授
- 2006年 財団法人人権教育啓発推進センター理事長
- 2010年 ILO条約勧告適用専門家委員会委員長
- 2010年 法務省特別顧問
- 2010年 日本国際連合学会理事長

【主な著書】

- 「歴史はいかに書かれるべきか」(翻訳)講談社学術文庫
- 「二〇世紀と国際機構」国際関係基礎研究所
- 「新版国際機構論」(共著)国際書院
- 「日本の国際法事例研究(1)～(5)」(共著)慶應義塾大学出版会
- 「国連再生のシナリオ」(共訳)国際書院
- 「国連の可能性と限界」(共訳)国際書院
- 「国際法入門」(共著)有斐閣
- 「国際組織法」(共著)有斐閣
- 「国際機構の法構造」国際書院
- 「日本の人権／世界の人権」不磨書房 ほか



パネリスト

今村 久美 (いまむら くみ)

特定非営利活動法人 NPOカタリバ代表理事
文部科学省生涯学習政策局政策課教育復興支援員
明治学院大学非常勤講師

2001年に任意団体NPOカタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラム「カタリ場」を開始。2006年には法人格を取得し、全国約400の高校、約90000人の高校生に「カタリ場」を提供してきた。

2011年度は東日本大震災を受け、被災地域の放課後学校「コラボ・スクール」を発案。第一校目の「女川向学館」を宮城県女川町で開校し、被災地の子どもに対する継続的な支援を行っている。

2008年「日経ウーマンオブザイヤー」受賞。2009年内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞。

【主な著書】

『カタリバ』という授業』2010年/英治出版



パネリスト

岩崎 香 (いわさき かおり)

早稲田大学人間科学学術院准教授

人間学博士、社会福祉士、精神保健福祉士。

所沢武蔵野クリニック、財団法人精神医学医学研究所附属東京武蔵野病院にソーシャルワーカーとして勤務。順天堂大学スポーツ健康科学部専任、准教授を経て現職。

【主な著書・編著書】

「人権を擁護するソーシャルワーカーの役割と機能—精神保健福祉領域における実践過程を通して」2011年/中央法規出版

「精神障害者の成年後見テキストブック」(編著) 2011年/中央法規出版



パネリスト

臼澤 良一 (うすざわ りょういち)

特定非営利活動法人 遠野まごころネット副理事長
大槌町小槌仮設団地自治会長
まごころ広場うすざわ館長
手紙文庫館長

釜石市で長年環境行政に携わる。定年退職後、岩手県環境審議会委員などを務め、地域の自然保護活動や環境教育などに従事する。平成21年度岩手県環境保全活動表彰受賞。

東日本大震災では、自らも自宅で津波に巻き込まれたが、被災直後から被災者支援のためにボランティアとともに復興野外カフェ「まごころ広場うすざわ」を開設した。「まごころ広場」ではボランティアだけでなく、被災者もカフェの運営に参加できるようにし、支援に頼るのではなく、被災者の自発的な力による救済・復興に取り組むモデル的事例として注目を得た。

現在、大槌町仮設住宅在住。被災者自らの町づくり、コミュニティ再生に向け、精力的に活動中。

【手記】

「世界別冊2012年第826号 東日本大震災・原発災害特集破局の後を生きる」

「被災の手記 東日本大震災 一私の体験 人は一人では生きられない」



パネリスト

大萱生修一 (おおがゆう しゅういち)

大念寺副住職
保護司
大槌小学校教振会長

大槌町の少し高台にある大念寺。寺の山門の前まで、車と家の瓦礫とともに津波が押し寄せ、360度火で囲まれたが、奇跡的に寺は残った。震災後、大念寺は、避難場所として被災者を受け入れ、救援の拠点になるとともに、同寺だけでなく被災した他の檀家の犠牲者の遺骨を預かった。

2011年8月、学生ボランティアを講師にした「復興寺子屋」を開いた。

※大念寺は1743年に町内初の寺子屋を開いたとされている。

盛岡会場

レジュメ



大人のコラボレーションとナナメの関係が 子どもたちの意欲を引き出し、見守る

コラボスクール  大槌臨学舎 について 特定非営利活動法人NPOカタリバ 今村久美

学校教育との連携
生徒情報やカリキュラムを共有し、協力関係を築く。

家庭教育環境の補填
・避難所・仮設住宅暮らしで十分でない学習環境の整備。
・遠方に働きに行く保護者を代行する指導者の配置。

地域教育機能の補完
・出会い・交流・体験を通したキャリア学習の機会創出。
・ナナメの関係で補う、失った分以上の新しい出会い。

「臨学舎」(りんがくしゃ)という名前は、江戸時代に大槌町に存在した寺子屋「臨書堂」から一字借りています。「臨」は、「向き合う」という意味を持ちます。「学びに向き合う」「今の自分に向き合う」そして、「震災に向き合う」ことができる、強い子どもたちに育てほしいという想いを込めて、大槌町教育委員会の伊藤教育長が名づけました。

【児童・生徒の負担】 無料 ※一部実費
【対象】 大槌町内の中学2～高校3年生
【人数】 193名(2012年7月現在)
【開校日時】 月曜～金曜: 16:30-21:00
土曜 : 13:00-19:00

【スタッフ】 現地塾講師2名 カタリバ職員7名・ボランティアスタッフ
【協力】 大槌町教育委員会・岩手県教育委員会・岩手大学
岩手県立大学・東京大学・大念寺・吉祥寺
【協賛】 メリル・リンチ証券・新日本監査法人・ハタチ基金・東北復興財団

【授業】
学力向上・習熟度別学習
論理的思考力・語彙・読解力
複眼的思考力・プロジェクト型学習
グローバルリーダーカ・ネイティブ英会話



カタリバ

震災で失ったものに対する気持ちをバネにして、新しい時代をつくる社会のリーダーを育てる。

「教科書にない答え」を学ぶ プロジェクト型学習



高校生 大槌ガイドプロジェクト

with Bank of America Merrill Lynch



問題発見解決グループワーク

with OECD

本物の英語を身につける 英会話



毎週2回 ネイティブ英会話

with Bank of America Merrill Lynch WAKU WORK ENGLISH

artist  ↔ 

復興ソング作曲プロジェクト
with Benesse®



外国人に大槌をガイドする

with Bank of America Merrill Lynch

カタリバ

東日本大震災と障害者

1. 孤立した障害者

- 情報が届かない、アクセスできない
- 情報が届いたとしても、自分で自分をまもることの限界
→高い死亡率

*それでも行政が把握できた数でしかない

2. 被災した障害者の困難

- 避難所における不自由
- 医療、移動手段、介護・医療用品の不足
- 地域全体の混乱の中で、自らの困難を主張することの困難

3. 届かない支援

- 社会資源の破壊…資源と個人を取り結ぶソーシャルワークの限界
- 人的資源である支援者をも飲み込んだ災害
→ネットワークの崩壊
- 外部からの支援
→形あるものは被災地に届いても、形のない支援は被災者にうまく届かない

4. 東日本大震災から何を学ぶのか

- 「障害者の権利条約」に照らして…
第11条「危険な状況及び人道上の緊急事態」
第9条「施設及びサービスの利用可能性」
第10条「生命に対する権利」
第19条「自立した生活及び地域社会に受け入れられること」
- 平等とは何か
- この教訓を活かしてどこまで想定して何を準備しておくのか
→新たな支援の創出への期待

被災地に於けるコミュニティの再生と被災者支援について



震災から学んだこと

価値観の変化

- ・ 救援物資の量よりも、人の心
- ・ 形のある物よりも、形の無い物

生きるとは・・・

- ・ 一人では生きていけない
- ・ 共に生きる

↓

生かされた者として何が出来るか

...

東に病気のこどもあれば 行って看病してやり 西につかれた母あれば 行ってその稲の束を負い 南に死にそうな人あれば 行ってこわがなくてもいいといい 北にけんかや そしょうがあれば つまらないから やめろといい ...

みんなに でのぼうとよばれ ほめられもせず くにもされず そういうものに わたしはなりたい

被災地の現状

- 1 被災者の雇用の場の消失
- 2 仮設入居者の買物難民の増加
- 3 仮設入居者の孤立化
- 4 コミュニティの崩壊
- 5 農・漁業者の困窮

被災者との交流場所の形成 ～まごころ広場うすざわ～




運営等

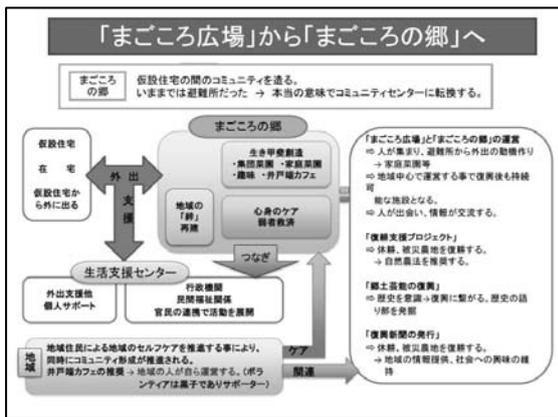
1. 開設日: 5月2日
2. 運営: 主体は被災者
ボランティアは黒子
3. 主な活動
青空カフェ、炊出し、バザー、理・美容カットサービス、マッサージ
無料法律相談、郷土芸能 等

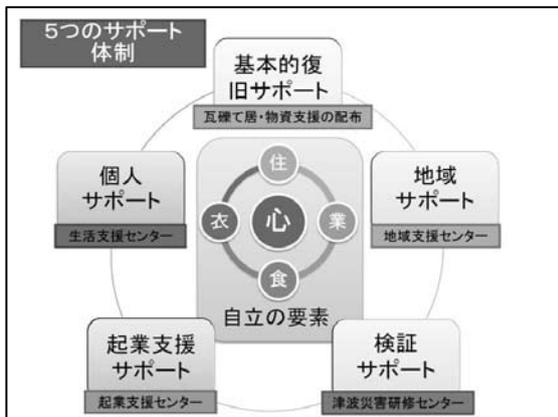
利用者の意見

- ・情報交換、交流の場として最適
- ・常に、誰かが居ることにより、気軽に立ち寄れる。
- ・他地区にも設置要望

↓

大ヶ口地区に「かけはし広場」開設





被災地から声を

その日までも
決して良くはなかった。

ふるさは疲れ、沈んでいった。

愛する人を失くし、
それまで積み上げてきた
多くのもの、
帰る場所を失くした。

本当に・・・未来しかないんだ。

だから
声をあげて語り合おう。

私たちのために
そして未来の世代のために。

大念寺が行う被災者の心の復興について

1. 大震災後、4～5日の様子
2. 避難所としての生活
3. 3月末からの遺骨引き受け
4. 4月末からの葬儀
5. ボランティアの受け入れ
6. 被災者どうしの心のケア